職工の食堂會議に

やゝピストルを差向くる憲兵

警官の劍で職工の監督は出來まい

目玉が横向けば日向ぼつこの怠業

高壓で購ひ得た止むを得ざる平靜

八幡

製鐵所の大罷工事件は表面的に一先つケリが付いたやうである、平日の通り林立せる煙突から濛々たる黑煙を渦巻けば喧しい機械の操作も聞えて居る十二日現在に於ける入門者は職工一萬四百五十八人職夫四千二十六人請負人夫九百六十九人で平素と大した相違がない、併し夫れは單に皮相の觀察であつて、安靜裏を極めて潜る大きな波が何時洶湧せる波瀾を揚げぬとも豫想されぬ、

專問

一職工と雖も生命を官憲の犧牲とする迄に歸する外はあるまい現に今回罷業の損害の如き白仁長官は六萬圓内外高をくつてゐるが何うしてく六萬や十萬は愚か少く共之に十倍した六十萬圓以上の損害に上つてゐると云ふ噂、もつと詮大

壓迫の犧牲とするには餘りに高價だから一時は鎭靜する

が又隙を見付けては氣勢を揚げて居る所んな風であるから平靜に終したか仕事の能率が平常通りたか云ふのは全く製鐵所側から飴をねぶらされた提灯記事に過ぎない、勿論斯かる不祥事の發生は産業を阻害する所たしいから誰しも早く鎭撫したい希望は山々だが當局が單に表面サーベルの威嚇ばかり加へて勞働者の中核心理の趨向を知らねば何時如何なる變狀を見ぬとも限らぬ、

三井あたりでは勞働者に極度の壓迫を加へてゐるさうだ

が三池炭坑の如き或は一紛擾持ち上るか知れぬ」云々と

◇◇◇◇

演說づくめ

八幡市勞友會及友愛會では十二日夜二回に演說會を開き前日同樣

續

永

工場

と云ふ所内の全工場には無數の憲官が配置されて恐ろしい目の玉で睨んで居る其の目の玉の横向いた時は依然

食堂で少しでも騷いで居ると實に彈を裝置したピストルを差し向ける

と云ふ始末だ、誰でも命は惜

火口を蔽ふ者ぞ、

それは製鐵所當局及サーベル諸公でないか友愛會の木村鋭吉君は詰

然として語る「職工の要求に對する製鐵所の回答は全く要領得ないから此上は機會が大臣及警保局長其他代議士連を訪して運動を動かし一方演說會を開會して民衆の公明なる輿論に訴へ飽く迄所期の目的を貫徹するつもりである此の事件に關し三井あたりでは勞働者に極度の壓迫を加へてゐるさうだ

福岡に飛ぶ

八幡に於ける問題喚起に努むると同時に勞友會及友愛會にては福岡縣の中心都市たる福岡市に今回製鐵所罷業顚末の報告演說會を開く筈で目下福岡市記念館を會場として借受交渉中である而して東京方面より有力なる應援弁士來り臨天協會の川島義二氏司會で開會の運定だが定めて盛會を見る事であらう。

工場の雜

◇工場に入つて仕事に對しては居る。警官の眼が光る時伍長や組長が巡視する時、エンヂンの前でも、仕上盤の前でも無心さうに仕事はして見える。ハンマーも叩いて聞かせる。然し警官や監督者が居なくなれば

◇仕事をして居る振をして仕事の行程を進めない。つまり巧妙な怠業をやつて居る。故に其の能率は平生の四分の一足らずであるといふ事だ。之でも問題は

工場を極むる陰性的怠業振

八幡製鐵所罷業事

去る五日より起つて天下の耳目を必要から

◇臭いも

に表面だけの

の警戒中

黑慘

私

刑

四名名を出